

「James D. G. Dunnによる口述伝承研究」 についての考察

大 宮 謙

1. はじめに

James D. G. Dunnはパウロ研究の第一人者として名を連ねると共に¹、福音書研究にも継続的な関心を持ち²、21世紀に入っても更なる顕著な業績を上げている。本論との関連においては、2003年刊行の『記憶されたイエス 形成過程のキリスト教 第一巻』³、および2013年刊行の『口述福音書伝承』において⁴、

1 その業績の一端については、J. D. G. ダン、浅野淳博訳『使徒パウロの神学』教文館、2019年を参照。

2 James D. G. Dunn, *The Oral Gospel Tradition*, Grand Rapids, Eerdmans, 2013, p.4に拠れば、Birger Gerhardssonの招きによりHenry Wansbrough主催の「イエスと口述福音書伝承」セミナーに参加したこと（セミナーの成果物が*Jesus and the Oral Gospel Tradition* edited by Henry Wansbrough, London, T&T Clark, 1991）などが関心の継続に寄与したという。Birger Gerhardssonについては、拙論「『Birger Gerhardssonによる口述伝承研究』についての考察」、青山学院大学宗教主任研究叢書紀要『キリスト教と文化』（34）、39-61頁を参照。

3 James D. G. Dunn, *Jesus Remembered Christianity in the Making 1*, Grand Rapids, Eerdmans, 2003. 続けて刊行された『エルサレムからの始まり 形成過程のキリスト教 第二巻』（*Beginning from Jerusalem Christianity in the Making 2*, 2009）および『ユダヤ人でもギリシア人でもなく 争われた出自 形成過程のキリスト教 第三巻』（*Neither Jew nor Greek A Contested Identity Christianity in the Making 3*, 2015）との三巻本である。

4 James D. G. Dunn, *The Oral Gospel Tradition*, Grand Rapids, Eerdmans, 2013. これは1977～2011年の間に既に発表した論文を一冊にまとめたもの。中でも本論との関係では、第2章「初期設定の変更 イエス伝承の初期伝達の見直し」（初出は2003年）、第8章「歴史、記憶、目撃者について Bengt HolmbergとSamuel Byrskogに応答して」（初出は2004年）、第9章「目撃者と口述イエス伝承 Birger GerhardssonとRichard Bauckhamとの対

初期キリスト教伝承の伝達過程に関して独自の視点を加えて論じている。

Dunn の基本的な立ち位置は、様式史家の洞察の最良のものを取り込みつつ、必要な修正を加えるというものである⁵。別言すればそれは、「文書による伝達に傾いた思考様式の修正」である。すなわち、文書資料⁶相互の関係性の分析においては積極的に様式史批判の成果を受け入れつつも、伝承が書き留められる以前の口述伝承、さらに伝承が書き留められた以降も文書伝承と併存する口述伝承、これら口述伝承独自の特色を初期キリスト教伝承の分析において、思考様式の変更を伴うほどに積極的に勘案するということである⁷。

話」(初出は2008年)、第14章「(新約)伝承史」(初出は2003年)が重要である。

5 Dunn, op. cit. (2013), p.58. *Ibid.*, p.63では、「文字レベルでの相互依存という仮説で、福音書の諸伝承の間の相互関係の全てを説明し得るのか」と問うている。この問いの背景として *Ibid.*, p.66は、「共通ペリコーベの13%以上は、80%以上が逐語的に一致している。しかし、共通素材の3分の1以上において、逐語的一致は40%未満という事実は、充分重んじられて来なかった。それは単に自由な編集という観点で説明されるべきであろうか」と述べている。一方、*Ibid.*, pp.77-78では、口述段階での多様性、二資料仮説および編集、これら両方の現在の福音書に対する影響をDunnは認めているのであって二者択一を求めている訳では無いと断っている。

6 ここで「文書資料」とは、主にはマルコを始めとする四福音書、「Q資料」を念頭に置いている。

7 Dunn, op. cit. (2013), p.41の言い方では「初期設定default settingの変更」である。また *Ibid.*, p.79では、「イエス伝承の口述伝承としての性質を認めることは、その性質を生きた伝承として認めることである」と述べている。こうしたアプローチをDunnが取るに至った背景の一つは、*Ibid.*, p.5に拠れば「(イエス時代の)ガリラヤの人口の10%ないしそれ以下が文字を解し、イエスの弟子の大半は文字を解さなかったであろうし、せいぜい少し解する程度であったであろう」というDunn自身の理解である。*Ibid.*, p.51 n.34に拠れば、「ローマ時代のパレスチナの識字率は10%よりも3%であったと推定される」という。仮にパレスチナの当時の識字率が3%であったとして、その相当な割合を祭司や律法学者が占めたことは想像に難くない。そうであれば、「庶民」の識字率はさらに下がると解し得る。こうした事情について *Ibid.*, p.290では、イエスの弟子の中で取税人マタイは職業柄読み書きができたであろうが、他の弟子たちがガリラヤの典型的な農夫や商人や漁師であった場合、弟子の大多数は字が読めなかったであろうと想定している。さらに、いささか大胆にも、イエスが字が読めなかった可能性にまで言及している。一方、リチャード・ボウカム、浅野淳博訳『イエスとその目撃者たち 目撃者証言としての福音書』新教出版社、2011年、282頁は、「イエスの取りまきと初期のエルサレム教会」のリテラシーに関して積

本論では、こうした Dunn による口述伝承研究の全体像を明らかにした上で、いくばくかの考察を加えたい。

2. 口述伝承一般に共通する特徴

さてでは、Dunn が積極的に取り入れようとしている口述伝承の特徴は、どのようなものであろうか。口述伝承一般に共通する特徴として Dunn は5つの点を挙げているが、ここでは特に三つの点に注目する⁸。

第一には、「口述伝承には共同体的性質がある」という点である。すなわち、口述伝承は「共同体の集会で、長老や教師や伝承の熟練した語り手によって語られ、生き続ける」という。その意味で、口述伝承は Dunn に拠れば「共同体の記憶 (communal memory)」と言い得るのである⁹。

第二には、第一の点に関連することであるが、口述が行われる共同体 (oral community) では、共同体の伝承を保持し、語ることに主に責任を持つと認められた一人ないし複数の人がいたという点である。具体的には、物語の歌い手、吟遊詩人、長老、教師、ラビがこうした責任を負ったと解される¹⁰。

第三には、口述伝承は、固定性と流動性、また不変性と多様性の混合であ

極的な判断を示しており、「かなり高度な写字活動が、そうとう初期の段階」でおこなわれていたと述べている。また、Dunn, op. cit. (2013), p.46では、「不幸なことにBultmannは文字という初期設定から逃れ得なかった。彼は文字という観点以外で伝達過程を考え得なかった。」と述べている。*Ibid.*, p.58に拠れば、そこでDunnが取り組んでいることは、「伝承の発展に関して、純粋な形から複雑な形へ、単純な形から練られた形へという間違った図解的な概念によって生じた混乱」を正すことであるという。

8 Dunn, op. cit. (2013), pp.53-57. Dunnはここに挙げた以外にも、①口述伝承が文字テキストを読むことと異なり、読み返しできないこと、②口述伝承においては、その伝達過程を層が積み重ねられるイメージで捉えることは適切とはいえないこと（この点については後述。本論「4.3 伝承の地層的理解への反論」参照）を挙げている。

9 *Ibid.*, p.75.

10 *Ibid.*, p.55に拠れば、こうした人々が共同体における「生き字引」としての役割を担ったということである。

るという点である。従って、口述伝承が完全に流動的だとは解し得ないという。

3. イエス伝承における口述伝承に関する Dunn の理解

次に、イエス伝承における口述伝承に関するDunnの理解を概観する。その際に、まずはイエス伝承のそもそもの発生に関するDunn独自の（少なくとも独特な）理解に触れておきたい。

3.1 イエス伝承の始まり

Dunnに拠れば、イエス伝承の始まりは「イエスがもたらした衝撃impact」であるという¹¹。それは、「イエスの働き、教え、その生涯がもたらした衝撃」である¹²。また、こうした衝撃を我々にまで伝えた伝承の担い手は、無関心な見物人でなく、この衝撃によって信仰を持ち、弟子となった者たちであったとDunnは解している¹³。すなわち、イエスに由来するこの衝撃こそが、弟子たちを生み出し、信仰を生み出し、信仰共同体を生み出し、彼らによって、イエス伝承は担われた¹⁴、しかも個人的にではなく共同体として担われたというので

11 *Ibid.*, p.314.

12 *Ibid.*, p.204では、この衝撃を、最初の弟子たちの生活を変えたという意味で、「変形力のあるtransformative」衝撃と言い換える。また、「イエスがイースター前に衝撃を与えたと断言することは重要である」と述べている。

13 *Ibid.*, p.315は、「たまたま何かを見聞きし、それを偶然にも記憶に留めた冷静なあるいは無関心の見物人によって保存された諸伝承を我々は手にしているのではない」と述べている。

14 *Ibid.*, pp.6-7, p.316. Samuel Byrskog, “A New Perspective on the Jesus Tradition: Reflection on James D.G. Dunn’s Jesus Remembered”, In *Memories of Jesus: A Critical Appraisal of James D.G. Dunn’s Jesus Remembered* (ed. Robert B. Stewart and Gary R. Habermas), Nashville, B&H Publishing, 2010, p.63は、Dunnが「衝撃と意図との区別をばやけさせ、意図がどのように言葉と行為による教えという手段によって伝達されたかを示し損なっているのは驚きである」と批判している。これに対してDunn, op. cit. (2013), p.205では、自身がイエスの意図を尋ねようとしたことが、我々が遡り得るのはイエス自身ではなく、記憶されたイエスにのみであるという自身の主張と比して奇妙であると認めた上

ある¹⁵。この意味で、Dunnの理解に拠れば、イエス伝承は「信仰的伝承faith-tradition」あるいは「弟子伝承disciple-tradition」と呼び得るのである¹⁶。

そして、こうした伝承が、「この衝撃を体現し、他者に伝達する手段」となったのであり、「この伝承の特徴から、我々はこの衝撃を与えた人物の明瞭な印象をなお得ることができる」とDunnは解している¹⁷。別言すれば、我々が得ているイエス伝承から湾を沖へと進んでイエスの出来事（ないしイエスのことば）そのものに行き着くことはできないが¹⁸、伝承に保持されているイエスの衝撃が（波のように）湾から押し寄せて浜にまで届いたと解することで、イエス自身に由来する何事かを（そのままの形ではないにせよ）我々は得ることができるという理解である¹⁹。確かにDunn自身、イースターのもたらした信仰と洞察の深化が伝承の発展に影響を与えたことを認めてはいるが、それでも語られた物語の実質、性格、筋書きにいかなる過激な変更ももたらさなかったと解している。すなわち、「イエス伝承における発展は、記憶されたイエスについての初期の伝承と首尾一貫していた」とDunnは解しているのである²⁰。

で、Dunn自身のポイントは、「イエスの使信の大筋と性質を、それが与えた衝撃から識別することは、パーチメントに残された刻印から刻印の形と材質を推論し、死体〔に残された〕弾丸の痕から殺人事件の捜査官が弾丸の弾道を類推するのと同様であるということにある」と述べている。

15 Dunn, op. cit. (2003), pp.240-41は、「伝承の形成が共同体的な過程であるのは、特にそのような伝承がしばしば共同体が共同体たる本質的なものであるからである。」と述べている。

16 Dunn, op. cit. (2013), p.315.

17 *Ibid.*, p.7. *Ibid.*, p.315は、「聴衆が伝承を記憶し、受け渡すのに十分な衝撃を起こす諸伝承のみを我々は得ている」と述べている。

18 *Ibid.*, p.7では、その理由として「文書化以前の形を取り戻そうとすることは、どんどん恣意的になる」ことを挙げている。Rafael Rodriguez, *Oral Tradition and the New Testament A Guide for the Perplexed*, London, Bloomsbury, 2014, p.8も「我々がいつもずっと文字テキストを研究しているという事実を見失ってはならない」と述べている。

19 Dunn, op. cit. (2013), p.7.

20 *Ibid.*, p.224.

3.2 イエス伝承の多様性

Dunnはイエス伝承と伝承が指し示す出来事そのものとの関係について、「出来事の伝承は出来事そのものではない。また、ことば伝承はことばそのものではない。伝承はせいぜい出来事の証言であり、おそらくいくつかの証言があったように、いくつかの伝承ないし伝承のいくつかの版が最初からあったに違いない」と述べて、伝承と出来事そのもの、ないしはことばそのものとの区別を確認し、かつ伝承の最初からの多様性を認めている²¹。そして、この口述段階での多様性が、福音書に見られる「同じでありながら違う」ことに相当に反映されているとDunnは解している²²。また、口述段階での伝承の最初からの多様性と関連して、各教会に知られていたイエス伝承を「一つの伝承ないし伝承のいくつかの特別な文書版に限定する理由は何もない」のであって、一つの教会が多様な伝承を知っていたならば、これらの「彼らが所有する諸文書から共同体の性格を我々が定義できるという提案」は非現実的であると断じている²³。

3.3 記憶されたイエス Jesus Remembered

ところで、もし上述のイエスによる衝撃が弟子を生み出し、信仰共同体を生み出し、伝承が形成されたという想定が当を得ているのであれば、イエスから衝撃を受け取った者たちが、その衝撃を記憶し伝えることでイエス伝承は生み出されたことになる。しかも、イエスの言動全てが記憶され、諸福音書に記録

21 *Ibid.*, p.56. *Ibid.*, p.315に拠れば、「イエスの言動が画一的な衝撃を彼の最初の弟子たちに与えたのではなく、これらのイエスに関する記憶を思い起し、受け渡すことが画一的に試みられたのでもない」。また*Ibid.*, p.201には、伝承の基となった記憶の背後にある客観的なイエスにまで至ることはできないことが述べられている。

22 *Ibid.*, p.5を始め、「同じでありながら違う」はDunnの共観福音書伝承史の研究における鍵となる関心事である。*Ibid.*, p.321は、様式史批判において「不幸にも『様式』という概念自体に議論の焦点があまりに当たり過ぎて、伝承の形成、伝承の伝達があまりにも画一化され定式化され、伝達過程が当初から持っていた〔伝承が〕生きているという性質と様式の適応性の認識が大きく視野から外れた」と述べている。

23 *Ibid.*, p.77.

されたのではなく、イエスの言動の中でも信仰を生み出すものが、それらの信仰を生み出す力の故に、記憶されたことになる²⁴。この意味で、「イエス伝承は、記憶されたイエスJesus Remembered」と言い得よう²⁵。そして、こうした理解に立つならば、イエスから衝撃を受けることのなかった「傍観者」は、原理的に言って、その衝撃を記憶する理由、原因に乏しく、まして彼らが相当程度の期間に渡り、その衝撃を語り伝える可能性は低くなるであろう²⁶。別言すれば、Dunnの理解では、傍観者の間ではごく短期間イエスに関する噂話が話題に上ったとしても、それ以上の継続性は保証し得ないことになる²⁷。

これと関連して、Dunnはイエス伝承の形成と伝達を個人の業でなく、弟子集団の営みと解している²⁸。既述のように、Dunnの理解に拠れば、イエスがもたらした衝撃は、それが弟子たちを生み出し、共同体を生み出した故に持続した。別言すれば、弟子たちはイエスに関する印象と記憶を共有した故に一つの

24 *Ibid.*, p.316. Dunnはイエスの言動として記憶された伝承全てが福音書に記録された訳でなく、福音書記者たちに選択権があったと解している。しかし、理由を明記せずに、記憶された伝承の中で福音書に記されなかったものは少ないと想定している。

25 Dunn, op. cit. (2003), p.882. *Ibid.*, p.329では「私が再び強調することは、自分が『イエス自身に戻る』ことを思い描いているのではないことである。我々が得ている全てはイエスが与えた印象、すなわち記憶されたイエスである」と述べている。Dunn, op. cit. (2013), p.201では「我々が得ているのは弟子たちが記憶したイエスのみであり、全方位的なイエスではない」と述べている。一方、この（Jesus Rememberedという）表現に関連して Byrskog, op. cit., p.66は、「memoryやremembranceによってDunnが何を意味しているのか何処にも定義していないのはより一層驚きである」と厳しく批判している。また「『記憶された』というラベルのDunnの使い方は、時に、より一般的な用語『解釈された』と区別するのが難しい」とも評している。これに対してDunn, op. cit. (2013), p.206は、自身が「記憶ないし記憶することの理論を何ら提示しなかったこと」を認めた上で、「記憶する際に解釈の要素があることを否定しようとは思わない」と述べている。

26 *Ibid.*, p.315参照。ここで「相当程度の期間」とは、イエスが十字架刑を受けてからイエス伝承が書き留められるまでの期間である。

27 一方、Dunn, op. cit. (2003), p.241 n.274は、「イエスについての物語が初期キリスト教共同体の外で流布していたことを否定しない」と述べてはいる。

28 Dunn, op. cit. (2013), p.316.

集団としてまとめ、弟子としての動機付けを与えられ続けたことになる²⁹。さらにイエスの十字架と復活を経て、「回心をもたらすconversion-effecting 衝撃」は、イエス自身が発した使信に起因するよりもイエスについての使信に起因するものとなり、伝承は衝撃の結果というよりも、衝撃を伝える媒介となったというのである³⁰。

4. 初期キリスト教におけるイエス伝承の伝達過程に関するDunnの理解

以上のことを踏まえ、次に初期キリスト教における伝承の伝達過程に関するDunnの理解を概観する。

4.1 口述伝承の伝達過程の全般的な性質

まず、イエスの言動についての口述伝承の大半は、時や場所を記憶することに関心がないとDunnは解している³¹。別言すれば、伝承された物語は、時や場

29 Ibid., pp.316-317に拠れば、社会学の観点から、集団形成においては、基礎となる伝承が集団の「出自と境界」を決定する上で重要な役割を果たすという。そして、この「基礎となる伝承」には、初期キリスト教においては、イエスの言動に関する共有された記憶、すなわちイエスに関する伝承が含まれるという。また、集団力学という観点からは、集団内の一部の人が部外者、新規加入者、集団の儀式のために、これらの伝承を記憶し、繰り返し詳述すると想定されるか責任を負わされるという。

30 Ibid., p.317はこの点について、「イエスの教えと生涯、死と復活についての伝承は、イエス自身が以前は直接的に与えた衝撃を媒介した」と述べている。

31 Ibid., p.318は、この点を「様式史批判の発展を背後で準備する洞察である」と述べている。小河 陽「様式史学派のイエス研究」（大貫隆・佐藤研（編）『イエス研究史 古代から現代まで』日本基督教団出版局、1998年、170頁に拠れば、Schmidtが『イエス物語の枠』の中で結論づけたことには、「イエス物語の枠を作り上げている連続する地理的・時間的な展開と見えるものは二次的要素である」。もしそうであれば、当然の帰結として、「福音書の枠組はまったく（歴史的）資料価値を持たないことになる（小河、前掲論文、172頁）。一方、自身も様式史批判の流れを受け継ぐTheissenは、別様の見解を示している（Gerd Theissen, *The Miracle Stories of the Early Christian Tradition*, Minneapolis, Fortress Press, 2007（原著1974、英語版初版1983）, p.172「導入のモチーフ、場所への言及は、しばしば編集的付加として削除されるが、『核となる』伝承を含み、この核には、編

所を離れて、物語の要点と価値の故に再話されたということになる。

さらに、類似の伝承は、記憶したり、再話したりし易くするために、口述段階で既に一まとめにされたとDunnは解している³²。その上、イエス自身が関連付けて連続して教えたものが保存された可能性にもDunnは言及している³³。すなわち、様式史家が想定するように、当初は小さな個々の断片としてのみ存在していた伝承が、書き留められた際か、それ以降に初めて「グループ化」されたと解する必要はないというのである³⁴。

4.2 伝承の質的变化

さて、伝承の質的变化すなわち移行について、Dunnは二つの局面を挙げている。一つはアラム語からギリシア語へ、もう一つは口述から文書への移行である。

まず、イエスが主に使用したであろう言語であるアラム語からギリシア語へ

集的要素を剥がすことによっては決して到達し得ない。オリジナルの素材に至るために『殻』を除くいかなる試みもここでは完全に不適切である」。

32 Dunn, op. cit. (2013), p.319は具体例として、マルコ4章、マタイ13章の「譬え集」、マルコ4:35-5:43、6:30-56のガリラヤ湖周辺の「奇跡物語集」を挙げている。一方、Dunn, op. cit. (2003), p.246は、「類似の教えやエピソードをグループ化することは、最初から教師と教えられる側、物語の語り手と通常の聞き手の両方にとって、明らかに記憶術的で教育的な手段であったであろう。」と述べている。

33 Ibid., p.246.

34 ボウカム、前掲書、234頁は、代表的な様式史家の一人であるSchmidtの「口述によって継承されていた伝承は、マルコの著作によって初めてつなぎ合わされ、ちょうど紐にとおされた数珠のようになった」という見解を紹介している。これに対して、Dunn, op. cit. (2013), p.78は、「我々は、初期の様式史家が行ったように、書き留められる段階以前に伝承が小さな個々の単位でのみ使用されたと想定する必要はない」と述べている。SchmidtとDunnの中間が、福音書記者が伝承を受け取る前にバラバラの断片が集められたという見解であり、例えばE. P. サンダース、土岐健治・木村和良訳『イエス——その歴史の実像に迫る』教文館、2011年、91頁は、「キリスト教徒の伝道者と教師とは……さわりのみを引用する代わりに、題材を構成する小単位を用いた。……ある時点において、これらの小単位は書き記され成文化され、通例、主題の内容に基づいて、より大きなまとまりへと集成された」と述べており、伝承の初期段階では個々の小単位が独立していたと想定している。

の移行については、移行時期は不明ではあるが非常に早い段階であったと想定した上で、この移行の要因として次の二点を挙げている³⁵。

1. ギリシア語を話すヘレニズム都市において、イエス伝承への関心が高まった。
2. エルサレムの弟子集団の中に、イエスの十字架と復活から数か月内に「ギリシア語を話すユダヤ人」(使徒6:1) が現われた。彼らは、多少なりとも最初からギリシア語のイエス伝承を聞き、利用していたと想定される³⁶。

もっともギリシア語への伝承の移行は、即座に、広範に、最終的に固定化されたのではなく、解釈を伴うギリシア語への翻訳は、地域による多様性を含んで流動的であり続けたとDunnは解している³⁷。

続いて、口述から文書への伝承の移行についてであるが、こちらも移行時期は不明ではあるが³⁸、伝承が書き留められ文書化された時点で、「静的状態へと凍結」³⁹された訳ではないとDunnは解している。また、この口述から文書への

35 Dunn, op. cit. (2013), p.325.

36 ボウカム、前掲書、282頁も「ギリシア語を話すディアスポラ出身のユダヤ人信者が多数いたエルサレム教会において、イエス伝承が初めてギリシア語に訳されたのであろう」と述べている。

37 Dunn, op. cit. (2013), p.325は「アラム語の伝承もアラム語を話す教会において何年も、あるいは数十年に渡ってさえ使用され続けたことは疑い得ない。現在のシリアの教会が初期のアラム語を話す教会の直接の相続者であると言うことも全く可能である」と述べている。

38 *Ibid.*, p.327は、「文書資料が現われた過程はなお非常に推測に基づいている」と述べている。ただ*Ibid.*, p.6では、「共観福音書伝承の大半が文書化されたのが、恐らく50年代後半よりも前である可能性はあまり高くない」とも述べている。一方、ボウカム、前掲書、240頁は、「初期キリスト者の共同体は、その大半が口述社会ではあったが、記述文書も存在しており、それが口述社会と隔絶していたわけでもない。」と述べている。

39 Werner H. Kelber, *The Oral and the Written Gospel: The Hermeneutics of Speaking and Writing in the Synoptic Tradition, Mark, Paul, and Q*, Philadelphia, Fortress Press, 1983, p.94. このKelberの言葉をDunn, op. cit. (2013), p.326は引用した上で、「こうした〔凍結したという〕見方は、口述伝承の流動性、文書伝承の固定性、その両方を誇張してい

伝承の移行は、一晚にして一気に実施されたのでもなければ、一度限りの出来事でもなく、むしろ相当期間に渡り両者は併存し続けたとDunnは想定している⁴⁰。

4.3 伝承の地層的理解への反論

以上のように、Dunnの理解に拠れば、イエスによる衝撃に端を発し、二種の質的变化（アラム語からギリシア語、口述から文書）を受けた伝承を福音書記者が受け取り、こうした伝承を基にして福音書が成立したことになる。この過程についての従来のイメージは、伝承が受け継がれていくに従って、伝承のそれぞれの担い手によって付加され、改変された部分がまるで地層のように幾層にも積み重なって行くというものであった⁴¹。従って、幾重にも重なったこうした層を丁寧に取り除いていくことによって、元来の伝承が顕わになると解されていた⁴²。これに対して、Dunnは、こうしたイメージそのものが間違っ

る」と述べている。なおRodríguez, op. cit., p.37はKelberを評して、「口述と文書による伝承表現の間に『大きな分裂Great Divide』を見ている」と述べている。

40 Dunn, op. cit. (2013), pp.326-327。なお、口述伝承が2世紀に入ってもなお重んじられたことの論拠として、Ibid., p.327はエウセビウス『教会史』Ⅲ. 39.4（日本語版は、秦剛平訳『教会史』（上）、講談社学術文庫、2010年、337-38頁）のパピアスの言葉の引用を指摘している。

41 John Dominic Crossan, *The Historical Jesus: The Life of a Mediterranean Jewish Peasant*, New York, Harper, 1991, p.xxviiiは、こうした文脈で「科学的地層学」がイエス研究にも必要であると述べている。一方、Dunn, op. cit. (2013), p.77は、「直線的な発展モデル、すなわち層の上に層、編集に続く編集は、もはや適切でない。」と述べている。

42 Ibid., p.328は、こうした方法論を批判して、「まるで古いペンキや壁紙の層を剥ぎ取ることができるように、あるいは巨匠の古い作品を不明瞭にするニスや汚れや変更の層を剥ぎ取って、元来の真正の傑作をもう一度顕わにできるように」見ていると評している。もっとも、このように伝承過程を地層的に理解する代表である様式史家も、層を引き剥がすことについては悲観的な成果を想定しており、決して「オリジナルの伝承」に行き当たることを楽観視している訳ではない。こうした悲観的見解を推し進め、しかも神学的に正当化したのがブルトマンの次の主張であると見ることもできよう。すなわち、「我々が遡り得る最古の伝承は『神の子として地上に生き、苦難を受け、死に復活し、天的な栄光に挙げられた人物を統一的に語り叙述する』原始教会のケーリュグマであり、その背後にま

ていると断じている⁴³。というのも、このイメージは文書伝達に偏った思考に基づくものであり、福音書の成立に至る数十年の伝達過程のどれほどの部分を口述伝承が担ったにせよ⁴⁴、口述伝承においては、その伝達過程を層が積み重ねられるイメージで捉えることは適切とはいえないからである⁴⁵。そもそも口述伝承の特徴は、それぞれの再話において伝承の核となる部分が保持される一方、詳細部については語り手の裁量に相当程度委ねられる点にある⁴⁶。従って、口述段階においては、伝承の再話は、それ以前の再話の上に積み重ねられるというよりも、むしろ核となる部分を共有しつつ、新規に並列されるというイメージで捉える方が実情により近いと思われる⁴⁷。

4.4 伝達過程における元来の強調点と特徴の保持について

さて、こうした口述段階のイメージを確認した上で、Dunnは、伝達過程において、元来の強調点と特徴が固定化されたと述べている⁴⁸。すなわちDunnの

で達することは不可能」(小河、前掲論文、186頁) という主張である。Dunn, op. cit. (2013), p.354も参照。

43 Ibid., p.328.

44 Ibid., p.326は、口述から文書への伝承の「移行の開始」時期を不明としている一方、Ibid., p.328は、口述での伝達が相当期間に及んだと述べている。

45 Ibid., p. 328. Eric Eve, *Behind the Gospels: Understanding the Oral Tradition*, Minneapolis, Fortress Press Edition, 2014, p.64も「口述伝承は考古学的掘削によって顕わになる一連の層でなく、ある推定上の『オリジナルの形』に到達するために逆回転させることのできる不変の発展法則に従ってもいない」と述べている。

46 こうした理解の背景には、DunnがKenneth E. Baileyの提示する「非公式制御口述伝承」過程を初期キリスト教伝承の伝達過程の自身の理解に相当に取り入れていることがありと思われる(Baileyの「非公式制御口述伝承」過程については拙論「『Kenneth Baileyによる福音書の口述伝承に関する研究』についての考察」、青山学院大学宗教主任研究叢書紀要『キリスト教と文化』(33)、91-115頁を参照)。またDunn, op. cit. (2013), p.59参照。

47 この点をDunn, op. cit. (2003), p.209では、「口述伝承においては、ある物語の一つの語りは、以前の語りを編集したものでは全くない。……それぞれの語りはその伝承自身を表現したものであり、その伝承の初版、3版、23版の表現ではない」と述べている。

48 Dunn, op. cit. (2013), pp.328-329では、「(伝承を) 何度も語ることによって、イエスの言動に関する元来の強調点と特徴が曖昧にされたり、見えなくなることは有りそうもな

理解に拠れば、口述による伝達過程を通じて、元来の強調点と特徴は固定化され、保持され、そのまま文書伝承に受け継がれたことになるのであろう。確かにイエスによる最初の衝撃から、最初の福音書であるマルコ福音書の成立までは40年前後であるから、極端に長い伝達期間では必ずしも無いであろう。しかし、されど40年が経過する中では、再話者も聴衆も多少なりとも取り巻く環境の変化を経験したことであろう。その中で、いかにして口述伝承は、その元来の強調点と特徴を保持し続けることができたかDunnは解しているのであろうか。

この点でDunnはBauckhamの提唱する目撃者による「制御機能」に基本的に同意している。すなわち、イエスの最初の弟子を中心とする目撃者たちは、目撃者証言を初期キリスト教伝承に提供しているのみならず、伝承が元来の内容から逸脱することがないように制御し、内容を保証する役目をも担ったというのである⁴⁹。ただしDunnは、この「制御機能」が実際のところ、どれほど広範に作用し得たのかという点には、やや確信が持てないことをも表明している⁵⁰。と言うのも、初代教会が急速に拡大する中で、イエスの言葉と行いに間近で接した目撃者である最初の弟子たちが、権威を持ってイエス伝承をチェックし得るには限度があるとDunnは判断しているからである。具体的には、集会の数が百を超える辺りで、新しく生み出された共同体を指導し、直に訓練するには、最初の弟子たちの数が足りなくなったかもしれないとDunnは指摘している⁵¹。別言すれば、言わば「人的制御機能」には数的制約があるというこ

い。逆に、これらの強調点と特徴こそが元来の衝撃を内包しており、これら（強調点と特徴）を保持し、維持することを（伝達）過程は企図している故に、正に元来の強調点と特徴こそが、再話の過程で固定化される」と述べている。

49 Dunn, op. cit. (2003), pp.242-243では、「我々は目撃者である〔伝承の〕担い手、最初から使徒や他の権威あるイエス伝承の担い手として認められた者の継続的な役割を忘れるべきでない。」と述べている。また*Ibid.*, p.243でも、「初期の伝達過程の共同体的性質に特別な注意を集中する際に、イエスが活動していた時期における彼あるいは彼女自身のイエスとの繋がりのために尊敬されている権威ある個人が伝統的により強調されていたことを割り引いて考えてはならない。」と述べている。

50 Dunn, op. cit. (2013), p.223.

51 *Ibid.*, p.224. *Ibid.*, p.208では、「キリスト教の初期の成長は、新しいそれぞれの教会に元

とである⁵²。

しかし、仮にこの指摘通りだとして、それでは管理者不足によって、イエス伝承には深刻な改変がその中核部にさえ生じたとDunnは解しているのであろうか。この点に関して、Dunn自身は、たとえ目撃者が不在の場合でも、イエス伝承はその性質と本質を保持したと述べている⁵³。すなわち何らかの「制御機能」はなお有効であったということである。どうやらDunnは、伝承の「型 (form)」と「本質 (substance)」がひとたび相当に固定化した後には⁵⁴、それほど伝承に変化を加えることができないと見て取っているようである⁵⁵。すなわち、目撃者の制御を離れても、伝承自身が自律的に保持されるとDunnは解しているように思われる⁵⁶。別言すれば、集合的記憶を持つキリスト教共同体

来の弟子たち（12弟子に限らず）が居続ける容量を直ぐに追い越してしまった」と述べられている。

52 *Ibid.*, p.229では、アジア州、マケドニア州、アカイア州などの主要地域から外れた地域の多くの小さな教会が、こうした「人的制御機能」の枠外にあると想定されている。

53 例えば、*Ibid.*, p.224では、「その教会の創設時に目撃者が不在でも、イエス伝承は今日まで我々がなお共観福音書伝承において見る同じ性質、内容を保持した」と述べている。

54 *Ibid.*, p.225は、復活信仰による解釈が目撃者証言に与える影響が限定的であるという文脈でボウカム、前掲書、350頁（原著355）が述べた「最初期の弟子たちの記憶は既に相当な安定性を得ており、更なる解釈的洞察（復活信仰による）によって変更される程度を厳しく限定化した」（私訳）を引用しつつ、彼ら（目撃者）によって最初に語られた内容についての伝承が、明瞭な属性無しに（すなわち、伝承の担い手が特定化されないままに）共同体を通してもたらされた伝承であっても、伝承の性質、本質、多様性を保持し得たし、そう想定すると述べている。

55 Dunnのこうした理解の背景には、Dunn, op. cit. (2003), p.208 n.185に記された自身の経験があるように思われる。すなわち、Dunn自身が、Baileyと1976年に会った際に聞いた二つの逸話を印象的であったので再話していたところ、20年以上に渡って逸話の大筋を押さえて、詳細部は変形して語っていたことに魅了されたと述べている。しかし、私見では、これはDunn自身の個人的な記憶に関することであって、「共同体の記憶」とも「伝承の制御」とも異なる性質のものであると思われる。

56 Dunn, op. cit. (2013), p.227に拠れば、「自身の命題（イエスが最初の弟子たちへの主要な衝撃を与え、それが彼らがイエスについて語った物語と彼らが受け渡したイエスによる教えに刻印された、ということが首尾一貫した描写を説明する助けになるという命題）の強みは、多くの伝承が最初の弟子たち（目撃者）に明瞭に帰されなくとも、それでも伝承

に伝承を保持する力があると見ているのであろう⁵⁷。

5. Dunn の見解のまとめ

さて、以上概観したDunnの見解をまとめるならば、次のようになろう。

1. 初期キリスト教伝承の分析では、様式史家の最良の洞察を取り込みつつ、文書伝達に傾いた思考様式を修正する必要がある、口述伝承独自の特徴を勘案する。
2. イエス伝承の始まりは、その働き、教え、生涯によって「イエスがもたらした衝撃」であり、無関心な見物人によってでなく、この衝撃によって信仰を持ち、弟子となった者たちによって、しかも個人的ではなく共同体として記憶され、担われ、伝承として我々にまで伝えられた。
3. こうした伝承の特徴から、我々はこの衝撃を与えた人物の明瞭な印象をなお得ることができる。イースターのもたらした信仰と洞察の深化は、伝承の発展に影響を確かに与えたが、語られた物語の実質、性格、筋書きに

にはイエスによって最初の弟子たちに与えられた印象の性質が刻印されているという点にある」。さらにDunnは、一連の説明の中で、「それによって最初の衝撃が口述伝承において恒久的にpermanently保持され、口述伝承によって伝達され、共観福音書伝承となった(口述伝承過程の)メカニズム(二か所の下線は論者)が示されている」とさへ述べている。57 Ibid., p.208では、おそらくこの意味で「イエス伝承の耐久性」という言葉を使用している。また、Dunn, op. cit. (2003), p.210では、「共観福音書伝承自身の中にこのような『非公式制御口述伝承』のしるしを我々が見つけることができるかどうか」という点に関して、自身が「それはあるし、見つけることができると信じている(下線は論者)」と述べている。こうしたDunnの理解に対して、Byrskog, op. cit., p.67は、「自分(Byrskog)は他の場所で、様式史家が共同体を偏って強調していることに不平を言ったが、同じようにキリスト教共同体を強調し続けるDunnに困惑している。」と率直に述べている。またボウカム、前掲書、257頁も「ダンとは……目撃者が伝承の開始部分にのみ関与するという様式史批評学的視点を基本的に継承している。」と評している。さらに同284頁も「ダンとは……伝承の『生活の座』を社会学的範疇として強調する様式史批評学者たちの前提から抜け出てはいない。」と述べている。

いかなる過激な変更ももたらさなかった。

4. 出来事の伝承は出来事そのものではない。また、ことば伝承はことばそのものではない。伝承はせいぜい出来事の証言であり、おそらくいくつかの証言があったように、いくつかの伝承ないし伝承のいくつかの版が最初からあったに違いない。この口述段階での多様性が、福音書に見られる「同じでありながら違う」ことに相当に反映されている。
5. 各教会に知られたイエス伝承を一つの伝承ないし伝承のいくつかの特別な文書版に限定する理由は何もなく、彼らが所有する諸文書から共同体の性格を我々が定義できるという提案は非現実的である。
6. イエスの言動についての口述伝承の大半は、時や場所を記憶することに関心がない。別言すれば、伝承された物語は、時や場所を離れて、物語の要点と価値の故に再話された。
7. 類似の伝承は、記憶したり、再話したりし易くするために、口述段階で既に一まとめにされた。イエス自身が関連付けて連続して教えたものが保存された可能性もある。
8. 伝承の質的变化すなわち移行として、一つはアラム語からギリシア語へ、もう一つは口述から文書への伝承の移行がある。両者とも移行時期は不明だが、ギリシア語への移行は非常に早い段階で開始されたと思われる。また、その移行は、即座に、広範囲に、一回限り行われたのではなく、相当期間に渡り、アラム語伝承とギリシア語伝承、口述伝承と文書伝承は併存していた。
9. イエス伝承が受け継がれていくに従って、幾層にも積み重なるというイメージは、文書伝達に偏った思考に基づく間違っただけのものであり、口述伝承においては、伝承の再話は、むしろ核となる部分を共有しつつ、新規に並列されるというイメージで捉える方が実情により近い。
10. 口述による伝達過程を通じて、元来の強調点と特徴は固定化され、保持され、そのまま文書伝承に受け継がれた。この過程には目撃者による「制御機能」が働いているが、初代教会が急速に拡大する中で、集会の数が百

を超える辺りで、こうした制御には限界が生じたかもしれない。

11. 伝承の「型 (form)」と「本質 (substance)」がひとたび相当に固定化した後には、たとえ目撃者による制御が機能しない状況においてもイエス伝承はその性質と本質が自律的に保持される。別言すれば、集合的記憶を持つキリスト教共同体には伝承を保持するメカニズムがある。

6. Dunn の方法論と見解へのいくつかの指摘

Dunnの方法論とその見解については、次の点を指摘し得よう。

1. 「イエスの言動についての口述伝承の大半は、時や場所を記憶することに関心がない」⁵⁸という指摘については、より細分化した分析が必要であろう。と言うのも、イエスの教えの中で、相当な衝撃を与えたに違いないものは、確かにその語られた状況を離れて記憶され、伝達されたであろう⁵⁹。さらに、こうした衝撃力ある教えは、繰り返し、少なくとも何度かは、時と場所の違う状況で語られたであろう⁶⁰。一方で、「イエスの行動」を記憶し、伝達する際には、時や場所に対する少なくともある程度の関心があったのではなかろうか。特に福音書の中に言及の少ない「自然奇跡」については、癒しの奇跡よりもより一層、時や場所への関心は高かったで

58 上述の「Dunnの見解のまとめ」6 参照。

59 例えば、「だれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい。」(マタイ5:39) や、「もし片方の手があなたをつまずかせるなら、切り捨ててしまいなさい。」(マルコ9:43) などを挙げ得よう。

60 イエスがこうした教えを公生涯で一度きりしか語らなかったと想定することは、相当に不親切な教師としてイエスを見なすことになるであろう。N.T.Wright, *Jesus and the Victory of God*, Minneapolis, Fortress Press, 1996, p.136 n.32も、「巡回伝道において、イエスは似ているが多少異なることを必然的に多くの機会に語ったに違いない」と述べている。

あろう⁶¹。

2. 「伝承は出来事の証言であり、おそらくいくつかの証言があったように、いくつかの伝承ないし伝承のいくつかの版が最初からあったに違いない」という指摘について⁶²、こうした「いくつかの証言」と「共同体の記憶」は、どのような関係にあるのであろうか。目撃者自身が共同体内で証言している限りは、目撃者ごとの個々の証言が、そのまま語られたであろう⁶³。しかし、目撃者でない者が口述で語る場合には、複数の目撃者証言を組み合わせたり、融合することも起こり得たであろう。従って、口述伝承の担い手の裁量によって、伝承は多様化する可能性と共に統合化される可能性もあったのではなかろうか⁶⁴。

3. 識字率の低さが想定されるイエス時代の地中海世界において、イエス伝承が特定の時期に口述から文書へと不可逆的に一気に切り替わるとは考えにくい⁶⁵。集会での読み聞かせも含めて、イエス伝承は「目から」でなく「耳から」入る性質を相当期間に渡って持ち続けたことであろう⁶⁶。

こうした状況に大きな転機を与えたのは、ローマ帝国とのユダヤ戦争であろう。と言うのも、この戦争はイエス伝承を「耳から」聞いて受け継い

61 ただ、Kenneth E. Bailey, "Middle Eastern Oral Tradition and the Synoptic Gospels", *The Expository Times* 106 (1995), p.365に拠れば、現代の中東の村の集会で「再話される素材はどれも必要な年代への言及がない」という。大まかな時代区分として「我々がコプト語を話していた時（15世紀以前）」とか「*Antinus*（2世紀にハドリアヌス帝によって建てられ今は廃墟となった近隣の町）が建てられた時」などと言って物語は語り出されたという。伝承の重要な部分の素材であっても導入が単に「昔々」である事例も紹介されている。もちろん、イエスの時代とは年代が大きく異なる事例ではあるが、「時や場所の記憶」に関しては、さらに考察を積み重ねる必要があろう。

62 上述の「Dunnの見解のまとめ」4参照。

63 ボウカム、前掲書、88頁は、「十二弟子に関しても、集団としての目撃者証言と個人が目撃者証言を分けて考える必要はあろう」と述べている。

64 Eve, op. cit., p.113の言い方では「衝撃の統合synthesis」。

65 上述の「Dunnの見解のまとめ」8参照。

66 もちろん、一方で、伝承史の早い段階で、「イエスの言動集が手記の形で書き留められ」（ボウカム、前掲書、244頁）たことも十分あり得よう。

できた従来のキリスト教共同体の集会を維持することに破壊的な困難さをもたらしたであろうから⁶⁷。この困難さに、一方では伝道の進展という要素が加わって、従来のキリスト教共同体の集会を越えてイエス伝承が伝達される機会が増えたことであろう。その中で、口述伝承から文書伝承への移行は、相当に進んだと解し得よう⁶⁸。

4. 「伝承の『型』と『本質』がひとたび相当に固定化した後には、たとえ目撃者による制御が機能しない状況でもイエス伝承はその性質と本質が自律的に保持される」というほどに伝承自身に、あるいはキリスト共同体に自律性を認めることは⁶⁹、私見では、論拠を見出すことが困難であるように思われる⁷⁰。目撃者自身でなくとも、権威をもって伝承を制御する特定の者の存在と働きを全く抜きに、伝承を自律的に制御することは、極めて困難なのではなかろうか⁷¹。

67 Wright, op. cit., p.135は「ユダヤ・ローマ戦争という重大な社会の破壊によってのみ、原始パレスチナ・キリスト教共同体の日常生活、そして物語を語ることは、すっかり壊されたであろう。それは……社会学的に、また歴史的に、伝承を書き留める完全な理由を提供している」と述べている。

68 *Ibid.*, p.135 n.30は、この点について、伝承が書き留められたもう一つの理由が、「元来の共同体を越えて伝道の場面で諸伝承が利用可能である必要」だと指摘している。

69 上述の「Dunnの見解のまとめ」11参照。

70 註57のByrskog, op. cit., p.67の指摘を参照。これに対してDunn, op. cit. (2013), p.207は、むしろ自身はByrskogの指摘に困惑しており、「自分は個人の役割を軽視しようとはしていない」と述べている。また*Ibid.*, p.218でも「自分もまた初期キリスト教共同体において伝承の保持と伝達に主要な責任を持っていた教師たちの役割を強調している」と述べている。ただ一方で*Ibid.*, p.207は続けて、「共同体の伝承としてでなく伝承を語ることは実際には不可能である」と述べている。関連して*Ibid.*, p.207 n.20では、「個人の記憶は彼／彼女がそれについて語り、他者と共有する時に、『社会的』となる」と述べている。しかし、私見ではDunnの言う「記憶の社会化」とByrskogが問うている「伝承の制御主体が誰であるのか」は、論点が異なると思われる。

71 ボウカム、前掲書、250-251頁もダンの視点に関して、「誰が制御機能を果たすのか……どのように制御が働くか」とWhoとHowの問題を問うている。また、「公式」だからと言って、必ずしも伝承が固定的とは限らない点に注意を喚起している。さらに、Byrskog, op. cit., p.70も、「Dunnは、確かに我々が『目撃者である（伝承の）担い手の継続的な役割を忘れる』（Dunn, op. cit. (2003), p.242）べきでないと断言しているが、この断言

5. 「初代教会の集会の数が百を超える辺りで、制御には限界が生じたかもしれない」という指摘に関しては⁷²、大きく異なる見解、すなわち新約聖書の時代において、教会は我々が通常想像する広がりや数の多さからは程遠い状態であったという見解も見られる⁷³。この見解の論拠は不明であり、かつそこで想定されている教会の具体的な数を読み取ることもできないが、もしそれが百を超えない数に収まるならば、Dunnの心配する「目撃者である最初の弟子たちによる制御の限界」は杞憂に終わることになる。
6. Dunnの議論がイエス伝承におけるエルサレム教会の役割を看過し、村の集会での伝達過程を重視している点についての批判がある⁷⁴。しかし、Dunn自身は、自分のモデルが確かに農村共同体に焦点を合わせていることを認めた上で、その理由として、一つにはイースター以前に始まったイエス伝承の伝達過程をモデルが含んでいること、もう一つにはエルサレムを超える、そしてすぐにパレスチナを超える初期キリスト教の成長をモデルが含んでいること、これらを挙げている⁷⁵。
7. 「口述による伝達過程を通じて、元来の強調点と特徴は固定化され、保持され、そのまま文書伝承に受け継がれた」という指摘に関して⁷⁶、物語の核ないし鍵と見なされたことが環境の変化によって変更されたり、形を

は彼が自分の見方を要約する時には重要でない (*Ibid.*, pp.253-54)」と批判している。この点で、Byrskog, op. cit., p. 70が、「(Dunnがその役割を重視する目撃者である伝承の担い手の『継続的な役割』が、Dunnの描いている伝承の共同の記憶によってアイデンティティを得る集団の絵の中でどのように説明されるべきなのかなお不明瞭なままである」という指摘にも留意することが必要であろう。ボウカム、前掲書、88頁に引用されている様式史批判に対するGerhardssonの「誰がテキストを形成し、再構築し、継承したかという具体的な問いに行き着かない」という指摘をも参照。

72 上述の「Dunnの見解のまとめ」10参照。

73 Birger Gerhardsson, *The Reliability of the Gospel Tradition*, Grand Rapids, Baker Academic, 2001, p.40。

74 ボウカム、前掲書、293頁に拠る。

75 Dunn, op. cit. (2013), pp.223-24 n.51.

76 上述の「Dunnの見解のまとめ」10参照。

変える可能性を無視していると批判されている⁷⁷。

8. 伝承の口述段階の多様性を反映していると解されている共観福音書の各版の相違は、マタイやルカがマルコ版を記憶によって利用し、マルコ版の文書そのものを目で確かめて使用している訳でないことに因る可能性が指摘されている⁷⁸。

9. Dunnの考察には記憶間違いについての考慮が欠如しているとの指摘がある⁷⁹。

7. おわりに

今まで見て来たように、Dunnはイエス伝承の始まりを「イエスによる衝撃」であると解し、この衝撃が口述伝承を経由し、文書伝承を経て福音書にまで保持されているという理解を示すことによって、イエスによる最初の衝撃から福音書に至るまでの連続的な理解を提示している。しかも、口述伝承の特徴を伝承経路の理解に取り込むことによって、従来、多くの伝承の層が積み重なっていると解されていたイエスから福音書までの伝達経路をより少ない階層から成る伝承の層のみが介在するものとしてイメージさせた点で大いに評価できるであろう。しかし、口述伝承が自律的に保持されることを主張する一方で、自身が折々に言及するほどには共同体内の個人が制御に責任を持つことを重視していないように思われる。そのため、結果的には、Dunnの初期キリスト教伝承の伝達過程に関する理解は、様式史家が「伝承」や「教会」を主語として伝承過程を匿名の担い手による伝達過程として描いたことに接近しているように思われる。また、イエスによる衝撃が信仰を生じさせ、弟子集団を生じさせ、伝

77 Eve, op. cit., p.111.

78 *Ibid.*, p.111. Eveは続けて、「John KloppenborgがDunnに応じて論じているように、Dunnが主張している共観福音書の並行記事〔の相違〕は、他の古代の著者たちが自分たちの文書資料に施したことの範囲に十分入っている。」と述べている。

79 これは*Ibid.*, p.114に拠ればDunnの弟子であるDale Allisonの研究テーマである。

承を生じさせたという筋道をDunnが重視するあまり、弟子集団の外で流布し続けた伝承をあまり強調していないように思われる⁸⁰。これらの点で、Dunnは、いわば「集中と理想化」に傾いた初期キリスト教伝承の伝達経路を描き出しているように思われる。すなわち、「イエスによる衝撃 → 信仰 → 弟子集団 → イエス伝承」への集中であり、「伝承が目撃者を始めとする共同体内の個人による制御を離れても、自律的に保持される」という理想化である⁸¹。

こうしたDunnの理解の傾向を踏まえた上で、初期キリスト教伝承の伝達過程の全体像の解明には、伝達過程に関する他のイメージについて、また、それらとDunnが提示した使徒たちを中心とした伝達過程との関係について、特にRichard Bauckhamによる目撃者証言を重視したアプローチを勘案しつつ、さらに探求することが求められるであろう。

80 註27をも参照。

81 *Ibid.*, p.224では、「イエス伝承における発展は、記憶されたイエスについての最初期の伝承と首尾一貫していた」と述べている。